

## 『現代の世界経済』ノート（続）

— 拙著の書評に答えつつ —

中山 弘 正

1. 拙著『現代の世界経済』（2003年4月）に関しては、その何回かの校正に入っていた段階で、その本の構成のこととか、再統合後の世界経済内の2類型のこと——イラク戦争のことでの欧米対立も関係し——、アジアの胎動といったいくつかの論点を整理して、研究ノートを作成していた<sup>(1)</sup>。

その後も、拙著執筆段階では、大学の紀要論文であったが、4ヵ月後に一冊の著作になった川上忠雄氏の作品をあらためて評したり<sup>(2)</sup>、拙著とほとんど同時だったり、前後だったりした諸著作などを整理し論じたり<sup>(3)</sup>、一番最近では、米国共和党内のブッシュ批判『ならず者民族』を評するなど<sup>(4)</sup>、拙著に関連しつつ仕事を続けてきた。本稿は、これらをも踏まえつつ、頂いた拙著への書評に答えながら、前記注(1)の研究ノートの続編として、その他の関連した著作にもふれてみたいと思う。

2. 拙著に対し頂戴した書評は、知るかぎりで見下6点公にされていて、評者の方々に先ず深い感謝の意を表明したい。

(i) 東條降進氏、『クリスチャン新聞』2003年6月29日号。

(ii) 岡田裕之氏、明治学院大学国際平和研究所『PRIME』第18号、2003年10月。

(iii) 勝俣 誠氏、明治学院大学『白金通信』、2003年12月1日号。

(iv) 佐々木隆雄氏、法政大学『経済志林』71巻4号、2004年3月。

(v) 塩原俊彦氏、『比較体制学会年報』41巻2号、2004年6月。85-88頁。

(vi) 馬場宏二氏、『生活経済政策』90号、2004年7月。37頁。

(i)、(iii)、(vi)は比較的短く(ii)、(iv)、(v)は比較的長い。これら公刊されたもの他にも読んで下さった上、ご批評・ご批判をいただいたままになっているものもあり、私信のものでも、内容が全く公的な部分については言及させていただきたいと思っている。

(i)東條氏は、「本書は一方で現在のアメリカが一極覇権国家、地球帝国化していくプロセスを経済学の分析手法で説明している。他方でこの地球帝国がキリスト教主義を標榜している謎の解明にも挑戦している。」とまとめておられるが、これはまさに拙著の焦点をついたものである。その成果とか評価は紙幅の関係もあり記されてはいないが、著者の思い定めていた企図もずばりと言いつつ当てたものである。この地球帝国に、何故、例えば逆に社会主義を標榜するものがならなかったのか。こうした問いを誘発されて、考えてみると、

最近の諸作品の中では、加藤栄一氏の論稿を想い出す。氏は、20 世紀資本主義の特徴を「福祉国家」とする近稿の中で、ソ連社会主義は「福祉国家イデオロギーを生起させた起爆剤」であった、としつつも、そもそもその「社会主義とは資本主義を根本的に批判する対抗文化」で、「資本主義の影法師」にすぎなかった、と論じている<sup>(5)</sup>。「影法師」だとすると、実体なしでは存在しないのであるから、冷戦構造を理解しやすくするが、一極覇権では実体の方が強い、ということになるのか。むろん、他のいろいろな要因を考えねばならぬであろうが、加藤栄一説が或る問題提起であることはまちがいない。

東條氏はさらに、「著者は聖書の黙示録の時代として、この出来事を受け止めているように受け取れる。キリスト教会が反キリスト化していく中で、なおキリスト者として生き続けるということはどういうことであろうか、ということも鋭く問う著書である。」としめくられた。同じキリスト者・経済学者として筆者の根源的な苦悩をびたりと言いつけられた。むろん、東條氏が筆者と同じ見方をしておられるかどうかはわからない。当然、独自の見解をおもちであろう。ただ、筆者の苦悩が、理解されているのである。じっさい、拙著を執筆していく中で、筆者自身が現代の目にみえる地上の教会については、それからつき放され、またそれをつき放して、一度は客観視するという内面的葛藤を伴うプロセスがあった、といわねばならない<sup>(6)</sup>。

聖書の黙示録の時代として筆者は地球帝国の「興亡」（注(1)91 頁）を考えているが、いわゆるディスペンセーション流に世界歴史と黙示録をひとつひとつ対比して考えているわけではない、何しろ「黙示」であるのだから。しかし、この事柄が拙著の中でも、もっとも唐突でわかりにくい

部分であるとは多くの書評でも、また私信、合評会などでも指摘されてきたことであるから、この点にふれないわけにはいかない。しかし、本稿ではもう少し先でその問題にもう一度立ち戻ることにはしたいと思う。

3. (ii)で（以下、頁数のみを本文に記す）岡田裕之氏は、30 枚（400 字）ほども詳しい書評をして下さった。

「独立・人権・民主・自由・繁栄をかけたながら世界に君臨するこの新しい『アメリカ帝国』とはいかなるものか。」(69 頁)が、「体制対立」に続いて今や「社会科学に回答を迫る現代の喫緊の課題である。」(同)とし、拙著の紹介に入る。歴史の時系列にそった第 I 部と、「世界経済の広域連関から解剖する試み」(同)の第 II 部とを、本当に詳しく要約して下さい。紹介の結びは拙著の終章で、「著者の予見であり地球帝国の運命の断定」、「結論は明快で、横暴な地球帝国の“没落”はずでに始まっている、と言う。『ヨハネ黙示録』第 8 章などのあと、巻頭の「剣をとる者はみな剣で滅びる」を締めくくる、とし）著者はここにレーニンのごとくエレミヤのごとく預言者として立つ。」(73 頁)とさえされた。

むろん岡田氏は、こうした拙著の「未熟で大胆な断言」である「帝国没落」論に疑問符を打たれている。「ヨハネ黙示録を引用されて『はい、なるほど』とすなおに首肯する人は（信者でないかぎり）少ないだろう。」(73 頁)この問題は(i)で関説したように少し後であらためて考えたい。この論点の前に岡田氏は「冷戦終結後を説明する覇権論から帝国論への展開は 9・11 以後の現在では定説とも言えるが、それがこの二回の世界大戦と米ソ体制間対立の冷戦の歴史過程を前提として始めて説明可能となるとする「分裂と再統合」の

観点は、十分にオリジナルである。……本書の意義はまずここにあると信じる。」(73頁)とされる。過褒の言葉であるが、拙著で筆者が、従来の多くの「西側（欧米）を中心とした〔或いは、のみの〕「世界経済論」」への強い不満から社会主義の問題を有機的に組み込んだ「世界経済論」に挑戦したことの意味が、ここではしっかりと受けとめられていて嬉しかった。とともに、「分裂と再統合」という視点はすでに何度かふれたように、岡田裕之氏自身のものでもあったことを強調しておきたい<sup>(7)</sup>。私も1990年代に入ってから「世界経済論」の講義でそうした観点をもってしたが、いずれにしろ、旧ソ連邦を中心とした社会主義の研究をしてきた者達にとっては、或る程度共通していたものだったのかもしれない。

岡田氏は拙著が「紛糾含み（プロブレマティック）の書」であるが、「手慣れた専門分野を離れてアメリカによる広域世界の統合という不慣れた分野に挑戦した」(73頁)点を評価して下さり、批評を続け、ハンチントン、フクヤマ、コルナイ、エルマン、ワイルズなどの「説明力を超えている」し、「二重の分裂」という拙著の概念設定を評価する(74頁)。また、軍事と宗教が積極的に生かされてはいるが、これらが「科学」と「予言」をプラス・マイナスの双方に媒介しているとも言え、魅力か脱線か評価は分れよう(同)、とする。過褒の部分だけを別にすれば、実に適確で鋭い批評である。

「細目への批判」も厳しく、第1に成長の計量分析、成長システムの進化・制度変貌論が不十分で、個別産業競争力・貿易収支・軍事費変動のみに頼っていて不十分である。第2に国際経済関係の貿易・資本移動論での不十分さで、フロート制下での地球化利益とその配分の非対称性、国際金融の不安定化・カジノ化の関連が説明不足である

(74-75頁)。「アメリカ銀行業（国際金融仲介）の強み、証券資本主義の過剰消費とデフレなど指摘されているけれども、金融アセット・土地価格の上昇と消費限界——日本の消費制約とアメリカの過剰消費——輸入増とデフレ現象などの追究が足りない。」(75頁)この最後の点、日本の過剰消費とアメリカの過剰消費が組み合わさっているという点は、拙著第5章の第2節、第3節で多少とも論じたつもりではあったが、上記の2点の批判は全く当たっていると思わざるを得ない。とくに第2点の場合など、自分でも従来力が不足するところだったので、学部での演習などでは、伊藤元重氏の著作など（これで十分なものかどうかかわからないが）を用いてきていたので、まさに痛いところを衝かれた思いである。

岡田氏は第3に「日本型システム」を拙著がどう解するかに疑問を提しておられるが、この点も、故橋本寿朗氏への依存が自分でもやや強すぎたと認めつつ、今後の課題ともしていきたい。

岡田氏は最後に大変興味深い自説を展開されている。拙著の地球帝国の没落説に関してであるが、アメリカのこの一極覇権は「この10年、さらには数年、今年、のことでさえある。地球帝国の実はいまようやく誕生し隆盛に向かいつつあるのではないか。ソ連・ロシアは市場と民主主義の学習に多忙であり、経済のライヴァル日本は停滞に苦しむ。……アメリカの覇権、世界支配の喪失はこれから先ではないか。」(75頁)この観点からして、拙著の「終章は著者の希望ないしは予言と読むほかない。」(同)と続く。確かに、筆者がはじめ考えていた拙著のサブタイトル——地球帝国の興亡——を出版に際し外したのも(本稿注(1)91頁)、「亡」は、未だ直接には見透せないからであったが、「2類型対立」の強まりもそこでは考えていた。2004年5月のEUの25ヵ国拡大も「地球

帝国」暴走へのブレーキ要因にならないだろうか。

岡田氏は「北朝鮮」の「破綻責任」を論じていない点も不満とされた。筆者ももとよりその問題を意識していなかったわけではないが、「拉致問題」が世間で余りにも日本主義の過剰情報とからめられていたので、敢えて全くふれなかったのであるが、拙著の力不足の一つであることは間違いない。なお、岡田氏は、この論点にも関説しつつ、『民主帝国』と『破綻国家』と題する研究発表も行なわれ、「中堅主権国民国家」という新しい概念を中心に、その偏寄として、一方に「破綻国家」を、もう一方に「巨大大陸国家」を置く、という考えを打ち出されていて、(本稿注(3)の注(22)) 今後の展開を期待したい。

4. 2の(iii)で勝俣氏は、経済学が「極度にマニュアル化・数式化し、社会の多様・複雑な動きを把握しきれなくなっている」時に、拙著は、「過去半世紀の世界経済の動きを歴史篇と構造篇にわけ、わかりやすく描写することに成功している。」と過褒の言葉のあと、「市場経済といっても人類史において唯一無二の社会組織形態ではなく、戦争(ヴェトナム戦争)、宗教・イデオロギー(レーガンのキリスト教原理主義、旧ソ連の公式マルクス主義)など多様な要因が経済史に作用していることを本書は教えてくれる。」と、わが意を得た批評を下さった。拙著の中で勝俣氏の著作もご紹介しているが、(131, 194, 204 頁)、アフリカ社会を研究してこられた氏にとって、拙著のこのていどの道具立てではとうてい不十分なのにはがいないと思う。

2の(iv)佐々木隆雄氏からは、ざっと40枚弱(400字)に及ぶ詳細な書評を頂き、驚き畏れた。当然、論点も多岐にわたっており不十分な回答となりそうである。

佐々木氏は先ず拙著の全体的テーマ(繰り返さないが)の重要性を指摘し、ロシア研究者である著者がこの大問題に真正面から挑戦しようとしている。とし、「情報過剰下で専門性という蛸壺に陥りがちな経済学者が多いなかで、このような大きなテーマに対する大胆な挑戦は注目に値する。」(370頁)とし、内容の詳しい展開に入っていく。

ただし、この「紹介」にところどころ、ちくりと鋭い批判が交じっていて、ハッとさせられる。例えば、第I部歴史篇を「米ソの両体制間対立にかなり限定して論じる。」(371頁)と表現されてみると、ああ本当にそこに絞ってしまっているなあ、それ以外の要因は「かなり」というより「ほとんど」捨象している、と反省させられる。また、第5章アメリカに相当ページを割いたとは自覚していたが、「本書全体のページの4分の1」(374頁)といわれて、あらためて、少しアンバランスだったかと思ったりした。第6章、アジア諸国では、「概してマイナス面が強調される。」といわれてみると、拙著でも紹介したように(64, 66頁)、スタグフレーション下でのアジアNICsの成長論(つまりプラス面)を佐々木稿で示されたときの衝撃を想い出す。また、日本についての橋本寿朗説への依拠、開発体制の見方の不十分さも(岡田氏にも批判された点であるが)、「筆者には理解困難」とされていて、厳しい。

後半で問題点に入り、第1に「二重の分裂からの再統合」であるが、「資本主義国間の分裂が終わるのが果たして90年代なのであろうか。」(380頁)「常識的には第二次世界大戦によって政治的な面での決定的分裂は終わり、経済面でも戦後のブレトンウッズ体制のもとでの国際経済の復活によって一応の再統合は終わったのではなからうか。」(同)とされる。これは、筆者から見ると、第1

の分裂の一応の「修復」に過ぎず、「再統合」といっているのは、第2の分裂、冷戦構造の「終わり」だけを指していたのである。筆者としては、この「再統合」で、逆に第1の分裂の方があらためて大きくなってきてはいないか（本稿注(1)）と見ていて、その点、むしろ、佐々木氏の「ごく最近のイラクをめぐる政治的対立はもちろんのこと、国際通商面や環境政策面等での欧米対立の深刻化など、先進国間の分裂が大きくなっているのも見逃せない。」(380頁)という事実認識はほとんど同じなので（本稿注(1)）、「分裂」「再統合」などの意味を「もう少し具体的に展開」する必要、というご指摘は、その通りであろう。ただ、この論点をめぐっても、佐々木氏が「国際経済」といわれるとき、自ずと、筆者の見る「西側」がそれを代表してしまっていて、確かに経済力では小さかったが、もう一つの異質の「東側」とに「分裂」していたかぎり、一つの「世界経済」はなかった、という拙著の主張と視点がどうしてもずれる気はしている。

第2の論点は「一極支配」である。(381頁)「90年代の世界経済の大変動をもう少し長い歴史のなかで眺めるとすれば、少し違った見方もできるのではなからうか。」(同)とされて、冷戦での勝利が、日本や東南アジアの経済危機ともダブル「権力の空白」が生じたため、「アメリカは『歴史の終わり』の幻想に酔」ったりしたが、21世紀の開始で、アメリカのバブル崩壊、同時多発テロの発生で、90年代幻想は色あせつつあるし、……反米感情や反グローバリズムの高まりもあって『ワシントン・コンセンサス』もかなりは過去のものとなりつつある。」イラク戦争という暴走は「90年代幻想というよりもっと深いアメリカの伝統的姿勢の発現という面があらうが、アメリカの国力をもってしてもアメリカが泥沼に入り込みつ

つあるという印象は免れがたいであろう。」(同)といわれる。となると、拙著は、「90年代幻想」と「もっと長期的視点」とを区別しておらないとはいえ、ここでも事実認識としては余り大きく差異はなく、佐々木氏の見解は筆者から見れば「地球帝国の終焉の始まり」と表現してもいいようにさえ思えるが如何であろうか。

第3の論点は、拙著がアメリカへの経済力の集中を強調しすぎていて、例えば「アジア特に中国経済の扱いが軽い」(382頁)という点であるが、目下の中国経済は、少なくとも2008年北京オリンピックまでは、か、日々激しく伸びていて、25ヵ国に拡大したEUとともに、アメリカへの対抗力として、もっと強く考えねばならなかったか、と思う。(今秋の短期訪中のこと次号で関説)

佐々木氏は、とりわけ詳しいアメリカに関し、さらに問題点を指摘して下さった。第1はディグラス・カーヴ（拙著、92頁）についての拙著の「過大評価」である。結論にしぼると、「60年代以降80年代までのアメリカの軍事費の減少は基本的に福祉国家的財政支出の拡大によって吸収されたから、軍事費と企業投資とのトレード・オフは基本的になかった。」(383頁)とされるのである。「福祉国家の成熟が軍事費の振替によって実現したところにアメリカの特徴があった。」(同)とされる。これは意外な、予想もしなかった批判で、虚を衝かれた、という感じであった。とくに、レーガン期に入ってから「福祉のカット」の印象が筆者には強烈だったせいも、筆者はそのイメージを、1960-70年代にも漠然と遡及させていたかもしれない。宿題とさせていただくしかない。

アメリカ経済についての拙著の第2の問題点は、株式バブル崩壊から長期不況を予想（佐々木氏は（予言）とされているが）した点で、もともと日本の平成不況ほどにも深刻になる見通しはなかつ

たので、じっさい氏自身の予想よりも順調、とされている（384頁）。「もちろん、これは何よりもブッシュ政権と連邦準備制度による異常な拡大政策の結果であり、バブル崩壊対策後遺症は対外赤字の拡大とともに、今後のアメリカ経済に重くのしかかるであろう。」とされるので、戦争経済を走り続けるブッシュ政権があるかぎり筆者もここでもまた事実認識をほとんど同じくするが、佐々木氏は「しかしそれでもバブル崩壊がアメリカ経済と世界経済の長期不況をもたらすとはいいにくいのではなからうか。」（同）と考えておられる。ここでわれわれはどうしても岐れ道に立ってしまうのである。今後の実態の展開を俟つかない。

最後の1点も痛いところをつかれていて、来るべき長期不況は過剰富裕化への成長路線より人類に望ましい、といいながら、ロシア・東欧の市場移行での生活水準大幅切下げを「悲惨と感じている」著者の「矛盾」が指摘されている。「成長」のもうひとつの側面を併せて、両面で評価すべきだというのである。確かに、無免許、無テレビ、無ケータイ、ほとんど無コンピュータ、といった程度で、「過剰富裕」からはだいぶん下に居ると漠然と思っている筆者自身の甘さがあるのかもしれない。

「終末論的発想」、「予言者的な断定」、「世界経済分析部分」との「かなりの断絶」が「素直に言って奇異な感じが否めない。」（379頁）との論点は少し後にまわすとして、佐々木氏の書評を拝見していると、「現代アメリカ経済」についての、氏自身のさらなるお仕事が姿を整えつつあることが感じられる、その出現を期待したい。

5. (v)の塩原俊彦氏は、精力的に現代ロシア経済を中心に次々と研究成果を出しておられる若手中堅のホープで<sup>(8)</sup>、広い視野と深い洞察力を示し

ておられ、このような方からかなり詳しい書評を頂戴したことも非常に嬉しい。

塩原氏は拙著引用の「黙示録」の少し先（8章10-11節）の苦ももぎ、チェルノブイリを指摘し、天使の「ラッパ」から拙著を音楽と関連して評された！塩原氏が音楽にも造詣が深いことに驚きながら、拙著の歴史篇・構造篇という座標軸の設定に「古典派の交響曲を感じる」とされた比喻に聴き入ってしまった。

「はじめに」と「序章」が第1楽章、主旋律は「地球帝国アメリカ」、第2楽章が世界経済の「歴史」、第3楽章は「構造」、フィナーレが「終章」とされる。全く過褒であることは論をまたないが、われながら心地良い。ただし、雑音の指摘も多い。第1楽章の「地球帝国」の「精神」の説明不十分、むろん、マックス・ウェーバーを意識したものではあるが。米国の国内市場に焦点をあてた点は良音とされる。第2楽章の演奏の際には「ヴェトナム戦争の世界経済的帰結」（拙著第2章第4節）が強調さるべきところとされ、また「キリスト教原理主義の巻き返し、レーガン路線」も良音とされた。

第3楽章で、アメリカの軍事化のプラスとマイナスの扱いでの「問題意識」では、先の本稿注（8）の新書『ロシアの軍需産業』と「まったく同じ問題意識を共有している」とされている。第4楽章は「逆説的な結論」だし、「地球帝国アメリカ」とその「精神」という主旋律がときとして途切れる、との不満がここで出される。一番の不満は、「多くの国民国家のGDP規模を上回る売上高を有する超国家企業〔いわゆる多国籍企業〕の動向」への目配りの不足、という点で、これは国民国家レベルの分析と並ぶ柱として、もともと樹てられていなければならなかったのではないかと、という点で、筆者は傾聴せざるを得ない。たしか

に、グローバリゼーションというとき、「多国籍企業」が果たしている役割はひどく大きいのであるが、筆者にはそれらのいずれも、最終的には「アメリカの」であったり「日本の」であったりする、という意識が強く、その意味で自然と国民国家単位またその政権の性格というところに分析が傾いていることはその通りである。確かに、例えば、米国貿易赤字、といっても、「企業の多国籍化が進む中で、……いわゆる『産業内貿易』（企業内貿易）の増加が実態という場合も多いので、即競争力の低下を意味するわけでもない」（拙著 101 頁）という認識は筆者ももっているのであるが、確かに「目配りの不足」は免れていない。

塩原氏は最後の方で、自らの「世界経済論」の構想を述べておられて、本当に興味深い。音楽での比喩は筆者には不明であるが、例えば「世界経済」を「権力という視角にたって論じる」、e-business を徹底分析するなかで 20 世紀の世界経済を「遡及的に再考察してみる」等々のアイデアである。イマジネーションに富んだそうした作品が氏の場合も姿をととのえつつあると感じられて、心から期待したい。

一番最後の一文節も短い重い問題提起である。拙著開巻の「剣をとる者はみな、剣で滅びる」（マタイ 26 章）に共感するが、ルカ 22 章には「剣を買いなさい」とのイエスの言葉が記されているという矛盾である。ここで詳論できないが、筆者はそれに続いて、弟子たちが「ここに剣が二振りあります。」と言ったのに対し、イエスの「それでよい」という発言を重視したい。どうやらこの剣は、イエスを捕らえに来た祭司長の僕の右の耳を切り落としたようであるが、聖書によればイエスはその耳に「手を触れて、おいやしになった」（ルカ 22：49-51）。マタイ 26 章は、「それと

も、わたしが父に願って、天の使たちを 12 軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。」と続く。筆者は「イエスは自衛権を認めていたのだろうか。」との塩原氏の問いに対して、「認めていた。しかし彼自身は取ってそれを放棄した。」と答えたい。そして、十字架受苦のゆえに、旧約時代の「万軍の主」も新約時代「平和の神」へと呼称も変わってきた、と<sup>9)</sup>。しかし、これ以上ここで述べると、佐々木氏などからもご注意のあった「経済学者はいかなる価値観や宗教観を持ってもいいが、学術的論文や書物を書く場合には、自己の価値観等からできるだけ自由でなければならないという一種の常識」から一層離れてしまいかねないので、「こうした対立する概念を取り入れては」との塩原氏の問題提起に謝意を表して、今後の課題としたい。

6. (vi)馬場宏二氏には読んでいただいただけでも嬉しかったが、書評を頂いて光栄である。「これはいわば蛮勇の書である。この規模の世界経済論を一人で書き下す猛者など、近頃では滅多にいない。通常は専門分野の異なる数人の執筆者の合作になる。」と、とにかく筆者自身、蛮勇をふるった挑戦だと思っていたので「猛者」といわれて、褒めていただいたと思うことにしたい。「ソ連東欧圏の専門家としての視角と、基督者としての知見を窺わせる」、の「東欧」は過大評価だが、「基督者」は嬉しい。が、これは、内容を要約して下さったあとの「この書で注意を引くのは、世界政治経済の動向にキリスト教が果たす役割を重視する、著者の視覚である。全てが十分な説得力を持つとは言えないが、アメリカの保守化がキリスト教原理主義との関わりで説かれ、EU の結束がキリスト教を基盤とするところがあると言われて見ると、経済分析も宗教的要因をもっと考慮すべき



だと改めて思わされる。」という文節につながり、しめくくりの端的な難問の提起への伏線をなしているのである。その難問とは。

「中近東地方の分析を回避してはいけない。焦点はイスラエルである。ユダヤ教を差別し続けたキリスト教が、ナチの暴挙を奇貨として、自ら果たすべき贖罪をイスラム教徒に押しつけた。それが今日の中近東紛争の根源である。人類文明や世界経済の存続は、実はまず、三柱の絶対神間で折り合いが付くか否かにかかっているのである。」

正直、この難問には一言も回答できない。

拙著では、中近東については歴史篇のオイルショックのところでもふれただけで、構造篇では全くふれてもいないので、本稿(1)の『ノート』では1ページ半にわたり弁明これつとめていた(86-87頁)。根本はそこで述べたように中近東が「私自身の知の体系や活発な関心などが空白に近い」ところに原因があり、アフガンなどに関する関心も、もっぱら「ロシア革命との類比」といったものにとどまり、「こうした地域の『精神』すなわちイスラムをも深く包んだ経済・政治の研究は、私にはそもそも空白であった。」(87頁)本稿注(3)でも、グローバリゼーションとイスラム「現代化」を扱ったものなどを補足的にとり上げたりしている(48-49)とはいえ、まさにイラク戦争なども強く関連している「イスラエル・パレスチナ問題」の欠如は、岡田氏に指摘された「北朝鮮」問題と並んで、拙著の二大空白部分と自覚しなければならないのであろう。

7. 公刊された書評の他にも、すでに本稿注(3)の52頁(22)でふれた福留久大氏のように、詳読して下さった上、多数の問題点を指摘して下さった方々も多く——福留久大「デフレ経済への対応策」『生活経済政策』2003,10でも拙著に言

及——、感謝しつつもご返事さえしていないものがほとんどなのである。私信なので、イニシャルで失礼せざるを得ないが、以下、何人かの方々のご指摘だけでもふれたいと思う。

T氏(先生、とすべきなのだが。以下同様)からは、金融方式の「欧米型と日本型」という拙著の対比(31頁外)だと、「欧米型」にライン型が含まれる可能性があるので、もう少し細かく「アングロサクソン型の直接金融とオーヴァーローン方式の日本」と対比すべきだとのこと指摘を受けた。その通りである。のみならずT氏からは、「1940年体制」で日本の間接金融方式が強圧的につくられたものが、戦後もメインバンクによる間接金融重視につながり、ここに来て「ようやく直接金融重視への改革」に迫られている、と教示された。メガ合併という現象(拙著121頁など)には注目していたものの、経営学の大家の視点はまた違う力があることを感じた。

N氏も「地球帝国アメリカの『精神』」という問題意識はご自分の関心とも符合する、とした上で、「BIS規制が邦銀叩きだったという下り(p.80)は、どうでしょうか。」とされた。「意図の一翼にあったこと」はわかるが、「自己資本ということの意味合いを再認識せしめたことは陰謀だった」と認識することになり、「いま現在の邦銀の自己資本不足は、欧米の罨がもたらした顛末だということになってしまいメガバンクの資本不足はじつは大きな問題ではないということにならないでしょうか。」とされた。期せずして、T氏のご指摘とも重なるもので、筆者の力量の不足がどの辺にあるかを反省している。N氏は、アメリカの一極覇権への経済力のバックとして「再工業化」(p.117)にも批判的で、むしろ、1990年代には、「80年代も顔負けのサービス経済化が進展し、アメリカ経済の金融化現象は進んだと見るべきでは



ないでしょうか。だからこそ経常収支では破格の赤字を継続していると見るべきではないでしょうか。」とされた。この点は、岡田氏に批判された（本稿(ii)75頁）「金融アセット・土地価格の上昇と消費限界……輸入増とデフレ現象などの追究が足りない」こととも期せずして重なる面もあり、筆者が今後もっと勉強せねばならない領域である。

岡田氏にも N 氏にも今すぐ反論が出来ないのであるが、ひょっとしたら筆者が、今回の一連の書評でも全くふれられていないが、Roger Bootle, *The Death of Inflation, surviving & thriving in the ZERO ERA*, London, 1996（拙著 107 頁）と出会って強烈な印象を受け、その影響が拙著でも出ているであろうが、アメリカはこの時点ではブートル自身認めているようにシェーマに収まりきれないものだった（しかし、近未来のことと予見された）こととも関係があるかもしれない<sup>10)</sup>。

K 氏からは、拙著の締括りの「黙示録」はわかるが、その後「コリント書」（第 1, 7 章 29 節）「時は縮れり」<sup>ちぢま</sup>がえらばれたのには疑問を呈示されて、わが国で余り知られていない「コリント書」よりも、むしろ「黙示録」また「原理主義キリスト教」や「エバンジェリカル」についてもっと説明すべきだったのではないかと、とのアドバイスを頂いて、深く教えられた。「黙示録」の引用は、あの『資本論』でマルクスが、商品から貨幣を導くところで用いていたことにもあやかったのであるが<sup>11)</sup>、そもそも『聖書』を含めてキリスト教が長く人々の生活・文化の中に広く深く滲み透っているヨーロッパなどとの違いをもっと意識すべきだったであろう。

それで、上記の諸書評でもまた合評会などでも必ずといってよいほど指摘された「黙示録」の引用に関連する拙著の「断絶、唐突」の問題である

が、まずは「終章」で全く馬場宏二氏に依りつづの<sup>12)</sup>、「経済成長」という目標自体が「環境破壊」をはじめ資源問題等々「死への駆足行進」と見ている、ということの「聖書的表現」である、と理解していただきたいと思う。アメリカが推進するグローバリズムが、地球を、人類を、死へと追いたてるものであるといった見方はむしろかなり広く展開されており、書評を下された方々も決して「成長万能論者」ではない。これらの方々の中では、馬場宏二氏がもっとも激しくグローバリゼーションがアメリカナイゼーションで、それが環境・地球・人類をおびやかしている最も悪辣な力だとその筆はいよいよ厳しい（筆者は全くそれに賛成である）とはいえ、ニュアンスに差はあっても、こうした問題意識は、或る意味では、すでにオイルショックの頃からかなり広く共有されてきたとさえ言えるのではなからうか。もしそう見るならば、それらは、人類・環境・地球の「終末」を見すえていると考えられるのではないか。

無論、聖書の「黙示録」を引用したからといって、それが即座の「終末」を断言している、と直結するわけではあるまい<sup>13)</sup>。しかし、これは時代的制約ということもあるとしても、現代ではむしろ「終末」を見すえることの方が一般的である（それゆえに、新古典派の市場至上主義は危険である）とすれば、「歴史の終局」を強く意識せしめる人類の古典として「黙示録」をもって締め括るということが、それほど奇異なことと筆者は自覚しなかった。

ただ、仮りにそうだととしても、その「終末」は人間の計る時間ではまだまだ相当先のことでありと意識されている場合が多いのに、拙著はこの時間幅をひどく（根拠もなしに）短縮しているとして疑問に思われたのかもしれない。しかし、黙示録の 8 章を引用したのは、（映画「第 7 の封印」

が相当有名になったこともあるが）、人類の「もち時間」が、今のグローバリゼーションの下、「地球帝国の一極覇権」の下、一層少なくなっていること、しかし、それでも、それを避ける方法をまじめに考えねばならぬこと（馬場氏の「過剰富裕論」は単なる悲観の書ではなく、諸提言が示唆されている）をいいたかったわけである。むしろ、「貧しき信徒」の立場から、そこには内面的諸問題が同時に意識され主張されているとはいえ、『資本主義はどこに行くのか』（本稿注(5)）のような、本当に傾聴すべき著作が出る時代の中で、筆者も一経済学者としても立っているつもりなのである。

8. 最後に、拙著との関連でごく最近の著作を3点ほど紹介したい。

ひとつは本稿注(4)ですでに言及した C. Prestowitz, *Rogue Nation* (2003) で、彼は、「ドルと英語と軍勢力」でグローバリゼーションが進められたが、それはアメリカナイゼーションだったという点（注(4)89頁）などをはじめ、ブッシュ大統領と同じ共和党の中にこのような考えの人がいるのかと思う位、われわれと大差ない「帝国アメリカ批判」を詳細・雄大に展開している。

また、拙著に何度も登場する「9.11」の如きアメリカへの反撥を予言したとさえいえるチャルマーズ・ジョンソンの『帝国アメリカと日本 武力依存の構造』（2004.7）<sup>(14)</sup> は、ソ連邦崩壊後も東アジアや中南米では冷戦構造は崩れなかったとし、アメリカの「軍国主義」化を詳論したりして鋭い。

もう一点は、拙著でも、ディグラスカーヴなどの紹介を含めその広いアメリカ経済・軍事の研究者として登場する藤岡惇氏の新著『グローバリゼーションと戦争 宇宙と核の覇権めざすアメリカ』<sup>(15)</sup> である。グローバリゼーションという言葉

自体が軍事用語から来ていることは知られているが、「冷戦期のアメリカ」のところから始めて、「ポスト『封じ込め』戦略を求めて」で、軍事革命、諜報覇権、さらに「新たな『地球戦争』を始めたブッシュ政権」へと展開し、宇宙を舞台にした核戦争、ミサイル防衛等が、詳しく分析されている。筆者には「宇宙衛星にとり囲まれた地球」という写真（同書25頁）が先ず衝撃的であった。豊田利幸氏なども永く研究し、警告もされてこられた領域でもあるが、本書は「米国の宇宙資産と宇宙覇権」が（米国民の命と財産とではなく）「守」られるために「情報の傘」も駆使されているという実態を明らかにし、これらの主導するグローバリゼーションが「独特の経済的・政治的・文化的・エコロジー的な副作用とコストをもたらす」（224頁）と警鐘をならし、「コミュニティと住民は、雇用と税源をもとめて人種・賃金・環境基準の『最底辺への切り下げ競争』にまきこまれる」とも注意している。

まさに、「黙示録」の時代の「現実」と感じるのはまたも筆者の思い過ごしであろうか。ああ、それにしても、この宇宙・核の覇権を追求する地球帝国が、何故に「キリスト教原理主義」なのであろうか。筆者はどうしても、また、わが身いかに小さくとも、『聖書』そのものに立って、その「非真理」を批判しないわけにはいかない。

#### 注

- (1) 拙稿『『現代の世界経済』ノート』明治学院大学『経済研究』第126号、2003年2月。
- (2) 拙稿「川上忠雄『アメリカのバブル 1995-2000』（2003年8月）」明治学院大学『経済研究』第128号、2003年12月。
- (3) 拙稿「世界経済と新『帝国主義』論』明治学院大学『経済研究』第129号、2004年3月。
- (4) 拙稿「Clyde Prestowitz, *Rogue Nation* (NY, 2003)」明治学院大学『経済研究』第130号、

2004年7月。

- (5) 加藤栄一「20世紀福祉国家の形成と解体」, 加藤栄一・馬場宏二・三和良一編『資本主義はどこに行くのか』(東京大学出版会, 2004年3月) 第一部第二章。この本の短い拙評が『生活経済政策』89号, 2004年6月にある。
- (6) 例えば, アメリカキリスト教界の大分裂も含めた分析の一つの拙評「Geoffrey Layman, The Great Divide. Religious and Cultural Conflict in American Party Politics, 2001.」明治学院大学『経済研究』第125号, 2002年12月。
- (7) 岡田裕之『冷戦から世界経済再統合へ』時潮社, 1997年。拙著110頁や本稿注(1)84頁など。
- (8) 最近の大著は、『現代ロシアの経済構造』慶應大学出版会, 2004.4であるが、『ビジネス・エッセックス』講談社現代新書, 2003.12, 『ロシアの軍需産業 — 軍事大国はどこへ行くか —』岩波新書, 2003.1など引続いて出されている。
- (9) 拙著『21世紀の平和を考える』いのちのこば社, 1999年8月の「彼こそ我らの平和」
- (10) 拙著, 148頁でふれたように, 橋本寿朗氏もブートルを高く評価しておられた。というか, 橋本氏の「デイス・インフレ論」を読んで, 私が読んだばかりのブートルのことを彼に告げたら中山にいわれて「さっそく彼の本を取り寄せて読んでみましょう」云々と「物価が低下することは良いことなのか?」(中央大『中央評論』224, 50巻2号)とわざわざ書かれたりして恐縮したことも, 今では懐かしい思い出となってしまったが。
- (11) 拙稿『『資本論』におけるキリスト教』(1), (2) (拙著『学院の鐘はひびきて』ヨルダン社, 1996年所収) など参照されたい。
- (12) 馬場宏二氏の一連の著作を掲げたいが, 例えば「自由化と過剰富裕化」本山美彦編『グローバリズムの衝撃』東洋経済新報社, 2001.4, 同氏「アメリカ帝国主義の特質」(『季刊 経済理論』第41巻第3号, 2004.10), 同氏「グローバル化と人類」『生活経済政策』2004.10, や, 同氏「資本主義の来し方行く末 — 過剰富裕化の進展と極限」(本稿注(5)第一部第三章) また, 氏に教示されたが, 氏や宇野理論について, Andrew E. Barshay, The Social Sciences in Modern Japan. The Marxian and Modernist Traditions. Univ. of California Press, 2004. pp.144-55 他。
- (13) 「……要するに唯物史観は歴史の発生と終極とを説かない。」と矢内原忠雄氏が『マルクス主義とキリスト教』(1932年)で述べているが(拙著『学院の鐘はひびきて』142頁), 経済学者マルクス(もマル経)も, 資源・環境・地球そのものの限界を見ずして「成長の限界」を取り扱ってはいなかったという馬場氏の批判は当たっているであろう。
- (14) チャルマーズ・ジョンソン 屋代通子訳『帝国アメリカと日本 武力依存の構造』, 集英新書, 2004.7.
- (15) 藤岡 惇『グローバリゼーションと戦争 宇宙と核の覇権めざすアメリカ』大月書店, 2004.7.

(2004.8.6 ヒロシマの日, 脱稿)

(2004年9月29日経済学会受理)